

文驎龍王の話（漢訳仏典『四分律』より）

大坪 併 治

昨年三月、大阪市天王寺の市立美術館で、「アンコールワットとクメール美術の一〇〇〇年展」を見た。当日会場で購入した写真集の解説書の初めに、主催者の「こあいさつ」が載っていて、それを読むと、アンコールワットとクメール美術の大意がわかる。

六世紀頃、現在のカンボジアの地を中心として、クメール族による仏教・ヒンドゥー教の美術が開き、およそ一〇〇〇年もの長きにわたって繁華を誇りました。特に九世紀になってアンコールの地が王都とされると、ここを中心に歴代の王によって神々や諸仏を祀る寺院が相次いで建造され、クメール美術は黄金期を迎えます。

なかでも、荘嚴な彫刻が施されたアンコールワット遺跡はクメール美術を代表するものといえますが、周辺には他にも多くの遺跡が存在し、アンコール遺跡群と呼ばれています。一九九二年にユネスコの世界遺産にも登録されたこれらの遺跡群の彫刻は、独自の洗練された造形美術をもつものとして、世界的に高い評価を得ています。（以下略）

（注）クメール族はカンボジア人。アンコールは王都、ワットは寺院の意味。アンコールワット遺跡は、カンボジアの西北部、タイとの国境に近いところにある。）

わたしは主として仏像を見学した。立像もあれば坐像もあった。日本人から見ると、少し口の大きい点を除けば、日本で見慣れた仏像と大して変わらなかった。しかし、坐像の台座を見て驚いた。普通の蓮台の他に、奇妙な形の台座がある。よく見ると、とぐろを巻いた大蛇なのである。大きな鱗が一枚一枚たんねんに彫り付けられている。仏像の後には光背に当たる所に、大蛇の頭が伸びて、仏像を覆う形になっている。頭は一つではなく、数えると、七つ。中央に一つ、左右三つずつ横並びになっている。エラが張っていて、普通のヘビと形が違っている。解説書のお世話になろう。三重にとぐろを巻くナーガの上に禪定印を結んで坐るブツダ像ので、ナーガは首をもたげ、七つの頭を広げてブツダを背後から守るしぐさをしている。これは、悟りを開いたのちも瞑想を続けるブツダを長く降り続く雨から守るため、地中より現れ

た蛇神ムチリングが自らの身体を傘にしてブツダの上に差し掛けたという伝の一場面を表している。ナーガは漢訳教典では「龍」と訳されるが、本来は蛇（コブラ）である。（一一五頁、「ナーガの上のブツダ」より）

コブラは、周知のように、熱帯に住む、猛毒を持った蛇で、長さ五米に達するものもいると言う。その恐ろしい毒蛇のところに、やさしい顔の仏像が坐っているのである。それは実に異様な構図であった。しかし、わたしは、この時点では、「伝の一場面」の出典を知らなかった。仏教は包容力に富んだ宗教で、異教の神々も、うまく取り込んで、仏教の守護神にしてしまう。恐ろしい毒蛇までも、仏陀の慈悲に救われ帰依して、仏教の守り神となったというのであろうと、自分なりの解釈をしながら帰って来た。

ところが間もなく、わたしは、「伝の一場面」が、現在解説中の石山寺本「四分律」の中にあるのに気がついた。この資料には、平安極初期の白点（コに上代特殊仮名遣の区別を止めている）が加えられていて、訓読することが可能である。「伝の一場面」の確実な出典の一つを、身近な資料に見ることができたことを喜んだ。これもまた、仏陀の慈悲によるものかも知れない。「妙法蓮華経」や「金光明最勝王経」のような、よく知られた経と違って、「四分律」は、読者に馴染みの薄い仏典で、こ存じない方が多かろうと思われるので、わたしが解説したものを紹介すること

にする。「四分律」は、僧の守るべき戒律を説く。原典は仏滅後一〇〇年に、曇無徳が上座部の根本律（八〇誦）から、四度に抄出したもので、漢訳されたのは、支那の姚秦の弘始一〇年（西暦四〇八年、日本では、反正天皇の即位三年）、訳者は罽賓の人、仏陀耶舎（Buddhāyasa）、覚称と訳す）、訳場は長安の中寺と伝える。わが国に伝来したのは鑑真の渡来と関係があるのであろう。）

（原文）

時、世尊食_二彼食_一已、即詣_二文驎樹・文驎水・文驎龍王宮_一。到_レ彼已、結跏趺坐七日思惟不_レ動。遊_二解脫_一三昧_一、而自娛樂。爾時、七日、天大暴雨極寒。文驎龍王自出_二其宮_一、以_レ身邊_レ仏、頭蔭_二仏上_一、而白_レ仏言、「不_レ寒不_レ熱邪。不_二為_レ風飄日暴_一。不_下為_二蚊虻_一所中触_レ上邪。」爾時、七日後、雨止清明。時、竜王已見_二雨止清明_一、還解_レ身不_二復邊_レ仏。即化_二作_一年少婆羅門_一、在_二如来前_一合掌胡跪、礼_二如来足_一。時、世尊七日後、從_二三昧_一起、即以_二此偈_一而讚_レ曰、

「離_レ欲欲喜樂。觀_二察法_一亦樂。世間无_レ悲樂。不_レ變_二於衆生_一。世間无_レ欲樂。越_二度於欲界_一、能伏_二我慢_一者、此最第一樂。」爾時、文驎龍王前白_レ仏言、「我_レ所_下以身邊_二如来_一、頭蔭_二如来上者、不_レ欲_二變_一邊如来_一。但恐_下如来身為_二寒熱・風飄・日暴・蚊虻_一所_レ觸。以_二是故_一、邊_二仏身_一、頭蔭_二其上_一耳。」仏告_二

竜王、「汝今帰二依仏一、帰二依法一。」答言、「如レ是我今帰二依
仏法一。」是謂下畜生中受二帰依一竜王為レ首。(石山寺本卷三
一 24 (五二一〇) 校異「麟」は、大正新脩大藏經に「麟」に
作る。

(石山寺本平安極初期加点による解説文)

時(に)、世尊、彼の食を食シ(已)りて、即(ち)文麟樹・文麟王・
文麟龍王(の)宮に詣(り)ヌ。彼(こ)に到(り)已(り)て、結跏趺坐
(し)て、七日思惟するに動(せ)不(解)脱三昧に(遊)びて、[而]
自(ら)娛楽(した)まフ。爾(の)時、七日、天より大(暴)雨して
極(め)て寒シ。文麟龍王自(ら)其の宮より出(で)て、身を以(て)
仏を遶(り)、頭をもて仏の上に(蔭)ひて、[而]仏に白(し)て言(さ)
く、「寒にモ(あ)ラ不(や)、然にモ(あ)ラ不(や)「邪」。風の為には「七」
飄セラレ、日には暴(せ)られ(左)アブル不(や)。蚊虻の為には触(觸)
セ所(レ)不(や)「邪」。とまうす。爾(の)時、七日の後に、雨止(み)
て清(ハレ)明(ハレ)たり。時に、龍王已に雨止(み)て清明(に)なりヌと見て、
遶(り)て身(を)解(キ)て、復(た)りて仏を遶(り)セ不(なり)ヌ。即(ち)一(り)
の(年)の[少(の)婆羅門を化(し)作(し)て、如来(の)前(に)在(り)て、
合掌胡跪(して)、如来(の)足(を)礼(せ)しむ]る。時(に)、世尊
七日(の)後に、三昧從(り)起(ち)て、即(ち)此(の)偈(を)以(て)[而]
讚(して)日(は)ク、
「欲(を)離(れ)て歡喜(すること)樂(シ)。法(を)觀察(する)イ亦(た)樂(シ)。

世間には患(苦)無(シ)樂(シ)。衆生を「於(に)婬(せ)不(あ)る(を)もて。
世間には欲(キ)樂(なり)。欲界を「於(に)越(度)して、

能(く)我慢(を)伏(する)者、此(レ)最(モ)第(一)の樂(なり)とのたまふ。

爾(の)時、文麟龍王、前(み)て仏に白(し)て言(さ)く、「我が
身をもて如来を遶(り)、頭をもて如来を蔭(ひ)たてまつる所以は
「者」、如来を燒(遷)せむと欲(ひ)てには(あ)ラ不(但(だ)如来
(の)身、寒熱・風飄・日暴・蚊虻の為に燒(せ)所(れ)むかと
恐(り)て、是の輩(を)以(て、仏の身を遶(り)て、頭をもて其の上に
蔭(ら)くのみ)「耳」とまうす。仏竜王に告(げ)たまはく、「汝
今仏に帰(依)シ、法に帰(依)したてまつるとイへ」トのたまふ。答
(へ)て言(さ)く、「是(の)如(く)なり。我今(佛法に)帰(依)したてま
つる」とまうす。是(を)畜生の中に二(つ)の帰(依)を(受)くる
には、龍王を「首」と為(とい)ふ「謂」。(風飄(り)風に吹かれる。日
暴(り)日にさらされる。蚊虻(り)カ・アブ(など)。

(備考) 1 返点は、原典のそれを後世の形式に改めると共に、

必要に応じて、私意によって補った。

2 ラコト点は平仮名で表した。

3 仮名は片仮名で表した。

4 原文にあっても直接読まない漢字、および加点者の
誤読や不必要と思われるラコト点や仮名は、「」で
包んで示した。

5 ラコト点や仮名の表記の不足を、私意によって補読

したものは、平仮名を（ ）で包んで示した。

6 濁点は、原典にはないが、文意の理解を助けるために、私意によって加えた。

7 引用文を示す括弧は、原典にはないが、文意の理解を助けるために、「」を用いた。

昨年、タイ国のバンコクで、アジア競技大会が開かれた。タイは、王家を始め、国民の九八パーセントが仏教徒の由。そのせいか、大会の運営はお行儀よく、整然と進められた。タイの選手たちが応援に応えて、小腰を屈めながら両手を合わせる仕草も微笑ましかった。夜は盛大なアトラクションが催された。五〇米もあるうかと思われる、青色の長い帯状のものを、大勢の人が担いでグラウンドを走り廻った。テレビを見ていたわたしには、何か分からなかったが、アナウンサーが「これはヘビです。タイでは、ヘビは釈迦を守るものとされています」と言うのを聞いて、アンコール・ワットの仏像を思い出した。とぐろを巻き、仏さまを乗せてはいないが、これは文驕龍王なのだ。インドで生まれた、コブラを仏陀と仏法との守護神とする信仰は、タイを経てカンボジアに伝わったのである。

今年六月、NHKの衛星放送開始一〇周年を記念して、敦煌・トルファン・カシュガルを結ぶシルクロードの特別放送が三日連続で行なわれた。わたしは特に敦煌に関心を持ち、テレビの前を離れず、全部を録画した。NHKのハイビジョンは宣伝通り素晴

らしかった。洞窟内の壁画も彫刻も、これまでに見たこともないほど、鮮明に色鮮やかに映し出されていた。仏像は立像も坐像もあつたが、坐像は結跏趺坐や半跏趺坐の姿は少なく、腰掛けて両足を前に出して交差するものが多かった。中村博士の「仏教語大辞典」によると、「箕坐(きざ)」という坐り方らしい。数少ない結跏趺坐や半跏趺坐の像も、アンコールワット展で見た、とぐろを巻いた大蛇に坐っているのは見当たらなかった。それどころか、日本の仏像で見慣れた蓮台さえなかなか見つからない。これはどういうことであろうか。仏教の発生地インドでは、池には蓮が咲き、草原にはコブラが這っていた。蓮もコブラも身近な存在であった。仏典の説話や仏像の莊嚴に、蓮やコブラが豊場するのは、自然の道理であろう。タイやカンボジアのように、インドに似た自然条件を持つ地域で、仏典の説話や仏像の莊嚴に、蓮やコブラがそのまま受け入れられたのも不思議ではない。ところが、カシュガル・トルファン・敦煌のシルクロードは、広大な砂漠を控えた乾燥地である。天山山脈の雪解けの地下水を利用して生活している人々には、池も蓮も無縁のものである。丈の短い草原にはコブラも住まない。敦煌の壁画を書いた画工、仏像を刻んだ仏師たちは、蓮もコブラも見たことがなかったのであろう。インドや中央アジアから訪れる異国の旅行者から話に聞くことはあつても、自分の目で見たことの無い人間には、明確なイメージは浮かばない。知らないものは描けないし、作れない。これは簡単明快

な道理である。

仏教の東漸には、南北の二道があった。南伝仏教は、蓮とコブラを伝えたが、北伝仏教は蓮を伝えて、コブラを伝えなかつた。蓮は、敦煌を素通りにして、インドから直接中国本土に伝えられたのではないか。中国には蓮が多いから、仏陀の指定席として、容易に受け入れられたはずである。(平成一一・九・二六稿)

(おおつば へいじ 岡山大学名誉教授)

(補説) 解説書の「仏伝の一場面」が、文麟龍王の話であることが分かったので、大正新脩大藏經の索引で調べたら、同じ龍王の似たような話が幾つか見つかった。仏典の名と類似の文句を紹介しておく。ただし、解説書の内容に最も近いのは、『四分律』である。

1 弥沙塞部和醯五分律 卷第一五(大正新脩大藏經一〇三頁)

「文麟龍」、「雨七日」、「今雨可畏。我寧可下化二作大身一、繞二仏七匝一、頭覆二仏上一、勿上レ使下風雨蚊虻惱中乱世尊上。」、「龍見二雨止空中清明一。捨二基本形一、化二作年少一。稽レ首白レ仏、「我化二大身一匝二繞七匝一頭覆二仏上一。欲下以障二蔽風雨一。蚊虻不上レ為二煩惱一。」、「世間誰レ欲樂、能伏二我慢一者、是為二最上樂一。」、「汝可下帰二依仏一帰中依法上。」

2 仏説太子瑞應本起經 卷下 (大正新脩大藏經四七九頁)

「龍有七頭一。羅覆二仏上一。欲三以障二蔽蚊虻寒暑一。」、「龍

化二作年少道人一。」、「仏得レ無レ寒、得レ無レ熱。得レ無レ

為二蚊虻二所中饒近上耶」。「仏告二龍王一、「汝當二復自帰二於

仏一、自帰二於法一、自帰二於此丘僧上。」即受二自帰一、諸

畜生中、是龍為二先見レ仏。」、「文麟替龍」

3 六度集經 卷第七 (大正新脩大藏經四二頁)

「龍名二文隣一」、「以三七頭二覆二仏上一。」、「畜生之中、帰レ

仏先化、斯龍為レ首。」

4 俱舍論疏 卷第一 (大正新脩大藏經四五四頁)

「食已詣二文麟竜宮一。到已同レ前入レ定。天雨七日、乃至龍

王以レ身透レ仏、頭蓋二仏上二等第六七日也。」

研究室受贈圖書雜誌目録(一) (平成十一年一月—十二月)

単行本

湖の本 四・一八・一九・四〇・四一・四二(秦恒平)

国文学年鑑(国文学研究資料館) 平成九年度

統・平家物語の成立(千葉大学大学院社会科学文化科学研究科)

名古屋大学所蔵古典籍国書総合目録(名古屋大学附属図書館)

名古屋大学蔵漢籍目録稿(名古屋大学附属図書館)

陽明文庫藏葉林抄(翻刻)(安田女子大学言語文化研究所日本東

洋研究部門)